

第6学年「てつがく」学習活動案

授業者 比樂 憲一

2月21日（土） 2階プレイルーム 9:00～9:40

1 題材名 自分

2 題材について

本学級の子どもたちは2学期において、「感情」に焦点を当てながら、その変化が何に起因するのかについて継続して対話を行ってきた。ここでは感情の変化が、他者の言動や状況によって起こることを具体的な事例とともに再認識できた。自分たちで出し合った問いに基づいて行われた対話が一区切りつき、次に選んだ題材が「自分」であった。この題材に決まった背景には、自分への関心の高さが窺える。

自分を題材として、子どもたち一人ひとりが考えた問いには、以下のようなものが挙げられる。なお、【 】内は授業者が解釈したキーワードである。

- ・「自分と他人の違いは？」【自他の境界】
- ・「『自己中心的な考え』と『自己中心的でない自分の考え』の違いとは？」【自己主張と他者配慮】
- ・「なぜ相手によって自分は変わる？」【関係依存的な自己】
- ・「なぜ環境が変わると自分の性格が変わるのか？」【状況依存的な自己】
- ・「人は自分自身の性格を全て理解しているのか」【自己理解の不完全性】
- ・「なぜ自分と周りを比べるのか」【比較による自己理解】
- ・「そのままの自分を出さないのに、そのままの自分を認めてほしいのはなぜ」【自己表現と承認】
- ・「自分が他人と共感・対立するのはどんな時？」【価値の共有と衝突】
- ・「理想の自分はどんな自分か」【現在と未来における自己の連続性】

上記のように、子どもたちの問いには他者を媒介とした自己認識や状況によって変化する自分、自由と責任、他者から理解されたいが、一方で自分を理解しきれない難しさ、自分と他者は何を大切にしているか、なりたい自分がどこから生まれているのかなど、いずれも「関係性の中で立ち現れる自己」の問題が表れている。これは、すなわち自己が個人の内面に閉じた固定的なものとしてではなく、他者や環境との関係の中で揺れ動きながら立ち現れるものとして捉えようとする子どもたちの問題意識を示している。このような問いを共有し、対話の俎上に載せることは、自分と他者の違いを優劣として処理するのではなく、自分と他者を複雑な理由や背景をもつものとして考えることにつながる。

6年生の3学期という、進級・進学を目前に控え、自身の在り方や人との関わり方をあらためて見つめ直す時期において、こうした関係的な自己理解を手がかりに、子どもたちが固定的な自己像にとらわれることなく、自分の変化や揺らぎを含めた在り方そのものを問い直すことを期待したい。

3 学習活動計画（5時間目／全9時間）

- （1）題材の決定と問いの生成…1時間
- （2）「自分」を題材として生まれた問いについて、対話しながら考える…7時間
- （3）まとめ…1時間

4 本時の活動について

（1）本時のねらい

「自分」に関する本時の問いについて、互いの考えを聴き合いながら考えたことを記述できる。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1. 前時を振り返る。	・前時に書いた振り返りの記述を参照する。
2. これまでの対話から生まれた問いについて、聴き合いながら考える。	・必要に応じて教師が内容を整理する。 ・聴くことを大事にしながら、対話に参加する。
3. 本時を振り返り、考えたことをノートに記述する。	・本時の対話前後における自身の考えを比較しながら記述する。